

パネル発表「心を成長させる学校飼育活動」

—もの言わぬ生き物が語りかけるメッセージを心で受け止める子どもたちを見つめて—

石島 敦子

1 はじめに

栃木県佐野市では、平成11年から今に至るまで獣医師との連携による授業や学校飼育環境の指導助言等が継続されている。

私は平成11年当時から獣医師の先生方にご指導いただきながら学校飼育活動に携わっている。時を経てなお、学校飼育活動が児童の心の成長に大きな影響を与えることを日々実感している。

2 命を実感する学校飼育活動

学校教育現場において子どもたちの心の成長を促すものは多々ありアプローチの方法も様々だ。

その中であって、「命」を実感できるもの—それが「学校飼育活動」である。飼育している生き物をかわいがり、大切に育てることにより、その「命」は、さらに大きく子どもたちの心に位置付く。そのことにより、子どもたちの心は、一層、深く、広く、大きくなる。机上の学習だけでは成し得ないものがそこに存在する。

3 「死」を実感することで知る「命」

かわいがり大切に育ててきたウサギの死。

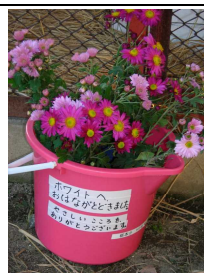
ホワイトがいてくれたから楽しかったです。わたしがタンポポをやると走って来て、ぜんぶ食べてくれました。わたしもホワイトのようにみんなをしあわせにしたいです。

ホワイト、今までありがとう。私たちに優しい心を残してくれたホワイトのことを私は絶対に忘れません。ホワイト、本当にありがとう。

平成22年4月。老衰で亡くなったウサギのホワイトへの児童の手紙の一部である。この後、ホワイトの飼育舎は名札と飼育委員が掲げたホワイトへの感謝の手紙だけで1年間空き室となる。ホワイトのことを感じていたいという子どもたちの

思いを受け止めてのことだ。ホワイトの思い出話は現在も上級生が下級生に語り継いでいる。亡くなった後も「命」は存在するということを実感する出来事であり、それは、思い入れの深さに比例していると思う。かわいがって育てたからこそ深く心に残るのだ。

飼育舎へは定期的に今も花が届く。



自宅の庭に咲い花を
ホワイトに供えている

4 新しいウサギ(=命)との出会い

平成23年度4月、卒業生から「新1年生のためにもううさぎを飼っては？」と課題を残された飼育委員たちは相談し校長室にお願いに行った。

「ホワイトが亡くなって1年たちました。私たちはホワイトのことを忘れませんが、新しい1年生のためにも、ウサギを飼いたいと考えています。うさぎを飼ってもいいですか？」

校長先生は、

「新1年生のためとはどういうことですか？」

と、質問されたそう。飼育委員は、

「私たちは、ホワイトにタンポポをやったり抱っこしたりして、ホワイトから温かさや優しさを分けてもらいました。そういう気持ちを小さい子にも味わってもらいたいのです。」

と答えたそう。校長先生は、

「あなたたちがそう考えたならいいです。飼うからにはしっかりと世話をしてくださいね。大切な「命」なのですから。」

という言葉で許可してくださったことを、飼育委員が報告に来た。

その後、ウサギがたくさん生まれたとの情報から、隣の市の小学校からウサギをいただいた。片手に乗るほどの小さな小さなかわいいウサギ。飼育委員は放送で呼びかけ、応募用紙を配付し、全児童、全教職員を巻き込み何回も投票を行い、絞り込み、「ハッピー」という名前が決まった。

その間も子どもたちには心配なことがあった。

「うさぎって、いつになったら歩けるのかな？」

その心配は教職員も同様だった。

5 見守り、育てる

上手に歩けないハッピーを心配して子どもたちは学校獣医師の先生に相談した。答えは「このまま普通には歩けず、排泄も困難なので毎日お尻を洗う必要がある」とのことであった。

「ウサギとのふれあい=抱っこ」は、命を実感する大切な位置にあると考え、ずっと取り組んできたことであったので、排泄障がいのため、それが実践できないということは、内心ショックであった。しかし、子どもたちはもちろんのこと、校長先生をはじめ全教職員「ハッピーは栃本小学校で大切に育てる」という思いは揺るがなかった。

6 想像を超えた心の成長

日常で聞こえるハッピーを介しての子どもたちの言葉・・・その言葉の一部を紹介したい。

“ハッピーはハッピーのままでもいいんだよ”

「ハッピーの足、なおるかな？」
と友だちが言いました。わたしは、
「なおらなくてもハッピーはハッピーだから大丈夫だよ。」

と言いました。みんなも、
「そうだよね。そうだよね。」
と言いました。大きな声で言いました。
…私はハッピーを育てている子どもたちの心の葛藤と成長をこの作文であらためて知った。それから、上記の言葉は子どもたちの合言葉になった。

“先生、仲良しが増えたよ！”

子どもたちは、ハッピーの周りに自然と集る。そこで、昼休みの相談をしたりや放課後の約束をしたりしている。ハッピーの大好きな草と一緒にやってやっているうちに、前よりとても仲良くなれたと、教えに来た子も多々いる。

“ハッピーの周りは笑顔が一杯”

ちょっといやなことがあっても、ハッピーの側に行くと、みんなが楽しそうに話しているので元気になると教えに来た子もいる。ハッピーを見て、みんなと一緒に笑っていると、幸せな気持ちになるという。

“ちゃんと勉強しないとね！だって、ハッピーが間違ったことを覚えてたいへんだよ。”

ハッピーの前で九九の暗唱や、一分間スピーチや、漢字を空中に書いて練習するなど、学習意欲の高まりもあった。そのとき笑顔で交わっていた合言葉がこれである。

“ハッピーの分まで全力で走る！”

「ぼくはどんなに苦しくても全力で走る！自由に歩けないハッピーの分も疲れても走り抜く！」
そう決めて毎日練習した、その子はタイムを縮め校内マラソン大会低学年の部で3位になった。

同様に、縄跳びでも「ハッピーの分も！」と、発憤し、例年学年一人くらいしか出ない校内特級がハッピーと暮らす2年生では6人も出た。

“先生、家のママもハッピーが大好きだって。”

ハッピーを好きだという母親のことを話し、自分の母の優しさを誇らしく語る女の子の姿に、
「家もだよ！」

「家だって！」

と喜々として誇らしく語る子がたくさん増えた。

“ハッピーのおかげで会話がすごく増えました”

ハッピーを育てるようになってから親子の会話が増えたことや、子どもが自分から話してくる日常を喜び、連絡をくださる保護者の方が増えた。

ハッピーの存在のおかげで会話が広がり、今までより親子が仲良くなれた気がするという。

“ハッピーが食べさせてって言ってるんだ！”

ハッピーはその障がいのため子どもが自由に抱っこするという事は難しい。でも、寄ってきて手から草やリンゴを食べてくれる、私たちを信頼してくれている、ということが子どもにとって大きな自信となっていることを感じる毎日である。



ハッピーに食べさせるのが
楽しみな子どもたち

7 学校飼育動物の存在

「そこにいるだけでいい。」・・・学校飼育動物の存在を言葉にすると、このことに尽きると思う。しかし、そこで忘れてはならないのが、「心」である。教師は、そこに存在する生き物を心に留め、子どもたちと世話をする、子どもたちと笑顔で話す、といったことを一緒に行うのだ。それだけでいい。それだけだ。それだけで子どもたちの心は成長する。大人の想像を超えて大きく成長する。その大きな成長の小さなきっかけを多くの子どもたちの与えていきたい。

8 実感する「継続は力なり」

栃木県佐野市での取組は、獣医師の先生方に変わらずに関わっていただき、14年目を迎える。

12月に来ていただいた獣医師の先生に、
「すごいね。みんな、頑張ったね。よくここまで大きく育てたね。」

と、ハッピーのことをほめていただいた。子どもたちは本当にうれしそうであった。誇らしい笑顔であった。これからも変わらず、獣医師の先生方に、様々な出来事に、多くの出会いに感謝し、子どもたちの笑顔や可能性をつないでいきたい。



ハッピーの成長を喜びながら、
自分自身も大きく成長する子どもたち

(佐野市立栃本小学校教諭)